

# 文化遺産の構成要素と 関連性の可視化

## —歴史文化基本構想と文化的景観の 報告書にみる表現方法—

### 1 構成要素の関連性の視覚表現

近年、歴史文化基本構想および文化的景観のほか、世界遺産、日本遺産など、広域にまたがる歴史文化遺産を一体的に捉え、理解しようとするのが稀なことではなくなった。そのような取組においては、各構成要素・資産の歴史的・地域的関連性、構造・機能を地域の環境を踏まえて把握することが重要であるが、複雑で人の目には見えない事物や現象を含むこともあり、それらを説明する際には文章によるだけでは難しい場合が多い。そのため、調査や計画に関する報告書においては、それらの概念が図表に視覚化して説明されている。本稿では、とくに歴史文化基本構想および文化的景観に関する計画策定や調査報告書の中で用いられているそのような視覚的な表現の方法のうち、代表的なものを取り上げ、その意義について述べる。

文化庁が実施した採掘・製造・流通・往来および居住に関連する文化的景観の保護に関する調査においては、文化的景観の評価指標として、景観の重層性・象徴性・場所性・一体性が挙げられた。同調査の報告書<sup>1)</sup>には、重層性は「景観が歴史的・社会的に重層して形成されていること」、象徴性は「景観がある時代又はある地域に固有の伝統・習俗、生活様式、人々の記憶、芸術・文化活動の特徴を顕著に示し、象徴的であること」、場所性は「特定の場所とそこで行われる人間の行為（活動）との関係が景観形成に影響を与えていること」、一体性は「諸要素が形態上・機能上、有機的な連関を顕著に示し、全体として一つの価値を表していること」と説明されている。このような重層性・象徴性・場所性・一体性は、歴史文化基本構想を考える上でも重要な視点であり、本稿で取り上げる各種の表現方法はこれらをわかりやすく視覚的に説明するために役立つものといえるだろう。

### 2 さまざまな表現方法

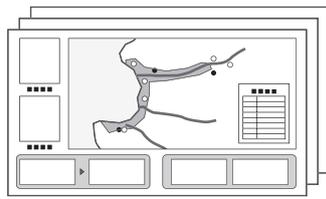
①**列挙・並置** もっとも基本的な方法に、各構成要素・資産の写真や図を列挙し、その位置や範囲を地形図を並置して示す方法がある。それらを互いの関係に応じて配

置し、線で結んだり、面で組み分けして関係性を表すこともできる。時代ごとに作成したり、系統図（樹形図）として整理されることもある。図の場合は、既往の様々な地図表現を応用することもできる。このような列挙・並置の方法は、次に述べるレイヤーを意識して用いられる場合もある。

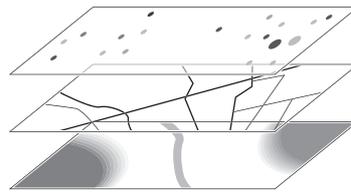
②**レイヤー表示** レイヤーはGISを用いるときに多く使われる方法である。地図上に地物や事象の複層を分けて示すだけでなく、時間的な変遷を効果的に扱うことができる。従来から遺跡の発掘調査成果をまとめる際にも使われてきた。この方法は、文化的景観の概念の説明に用いられることがよくあるが、文化的景観に関する報告書にはレイヤーを強調して説明する事例はあまり見られない。その理由のひとつとして、複層は先述の「列挙・並置」によって、より多くの情報を見やすく説明することができることが挙げられる。

文化庁発行の『史跡等整備のてびき』<sup>2)</sup>では、地域を構成する歴史・文化・自然の各事象の把握のための方法として、「マッピング」を挙げている。これは、諸要素および文化財・文化遺産を種類および時代ごとに分類し、地形図上に表示する方法であり、それらと地域の歴史・文化・自然の各事象および時間的・空間的文脈などとの関連を読み取ることができると解説されている。

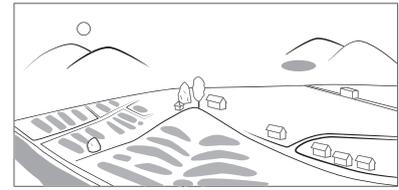
③**鳥瞰図** 鳥瞰図は上空から俯瞰した絵地図のようなものである。パノラマ地図とも呼ばれる。古くは室町時代末期から江戸時代初期の洛中洛外図があり、その後の名所図会や浮世絵にも利用された。道中図や河川図のようなルートマップもある。その特徴は立体的に地域の全貌を見渡せることである。現代では航空写真も効果的であるが、イラストの場合は、拡大縮小や濃淡などによって意図的に強調と省略をおこない、重要なもののみを際立たせることができる。主題に合致する構図や方向が検討され、線や文字を注記することもある。場合によっては実際の地形や位置関係を変形して描いたり、四季・昼夜による時間や気候の違いを表現したりすることもある。奈良文化財研究所の文化的景観の研究においても各地の図面を作成している（『紀要 2014』巻頭図版3など）。文化庁の歴史文化基本構想、文化的景観、および歴史まちづくり法のパンフレットには模式的なものが掲載されている。



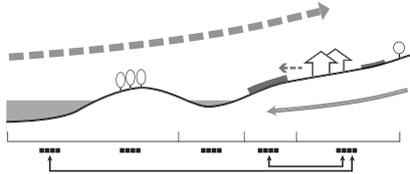
①列挙・並置



②レイヤー表示



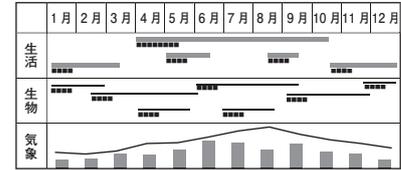
③鳥瞰図



④断面模式図

		時代							
		1	2	3	4	5	6	7	8
区分	A	ア		ウ		カ			
	B			エ					
	C		イ						
	D			オ					

⑤表



⑥暦

図30 構成要素とそれらの関連性に関するさまざまな表現方法

現在では、熟練した絵師や技術者による描画のみでなく、データ化された標高数値を利用したデジタル地形の立体表現が利用されることもある。真上からだけではなく、様々な角度（俯角）や距離から最適な鳥瞰図を作成することができる。

④断面模式図 模式図は平面図として作成されることもあるが、断面模式図によって、構成要素・資産の典型的な全体構造が地域の地形を踏まえて効果的に示される場合が多い。文化庁が実施した文化的景観のモデル事業の報告書<sup>3)</sup>においては、すべての事例の説明に断面模式図が掲載されている。例えば、屋敷地と農地、水路・河川などの構成要素と、雨風や風などの自然現象との関係について、図の中に文字や矢印を書き込んで説明することもおこなわれており、この方法の特徴といえる。

⑤表 一定のまとまりをもつ地域の歴史の大まかな流れと、その地域の特性との関係は表の形式で整理されることが多い。例えば、縦軸に時間軸を取り、横軸を地域区分、または地域の産業・流通・文化などの区分とし、横の関連性についても表示をする。そのようにして、地域の歴史における文化財・資産とそれら相互の関係や、それらを結びつけるストーリーの全体像を示すことができる。

⑥暦 伝統的な生活や生業は季節に応じて一年のサイクルでおこなわれることが多い。フェノロジー（季節学）では、季節的におこる主として自然界の動植物が示す諸現象の時間的変化が扱われる。これに、人間の生業や行事をあわせると、一年間の自然と人間活動の流れの有機的な関係を、無形の要素も含めて把握することができる。日本には古くから季節ごとに事物や行事を書物にまとめた歳時記がある。現代、史跡等において視覚的に表した例には、考古学の分野で縄文時代の生活の説明に利用されているものがあり、庭園では花歴が普及している。近年では特にエコツーリズムの取組において作成さ

れることが多いようだが、生活・生業のあり方をあきらかにしてその保存・活用を図る文化的景観の取組においても有用な方法といえるだろう。

### 3 おわりに

以上のような方法は、冒頭に述べた各構成要素・資産の歴史的・地域的関連性、構造・機能、さらにはそれらの重層性・象徴性・場所性・一体性の概念を表現する際に用いられているものであり、調査および計画の検討段階においても、これらを意識することにより内容の精査やさらに深い分析に役立てることもできるであろう。

文化的景観の保護や住民参加による歴史文化遺産の活用の取組においては、一般市民への理解を求める普及啓発が必要であり、わかりやすく伝えることが重要となる。優れた図解は印象深く記憶に残りやすいという長所もある。一般に視覚表現は医学の領域で進んでいるといわれるが、近年は観光の分野においても地域の歴史や文化に注目が集まっており、各構成要素・資産の関連性など、概念的な情報を利用者に直感的に伝える必要が高まることにより、以上のような方法が様々な発展していくことが予想される。さらに、本稿では主として報告書を対象としたため動画や映像は含めなかったが、最近多方面でそれらの利用が進んでいることを考えれば、歴史文化遺産に関する展示・解説の場においても組みあわせられ進展するものと期待される。

(中島義晴)

#### 註

- 1) 採掘・製造、流通・往来及び居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究会『採掘・製造、流通・往来および居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書』8頁、2010。
- 2) 文化庁文化財部記念物課『史跡等整備のてびき—保存と活用のために—計画編』40頁、2004。
- 3) 文化庁文化財部記念物課『農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究報告書』279頁など、2005。